

日本語学習者のイントネーション研究の展望

—韓国語と日本語の句末境界音調に注目して—

金 瑜眞

キーワード：韓国人日本語学習者、句末境界音調、母語話者評価、第二言語習得

1. はじめに

韓国人学習者の発音には、文節末に上昇調（大坪 1987）やピッチが上昇後下降する昇降調（関光準 1989）が見られ、「失礼な感じを与える」「聞いていて疲れる」（李恵蓮 2004）など日本語母語話者に否定的な評価を受けると報告されている。しかし、文節末の上昇調や昇降調は、母語話者の発話にも現れ、上昇調は、口調を和らげたり、発話がまだ終わっていないことを示し（例：むかしむかし、大江山といふ所に…）（川上 1963）、昇降調は、意味的な強調（例：しなければ^{注1}ならない）（村中・原 1994）を表す。これらを学習者が意図的に「学習」する可能性については、先行研究であまり論じられていない。

こうした文節末のイントネーションは、「句末境界音調」（以下、境界音調）と言われ「韻律句（prosodic phrase）末尾に生じる音調で発話の語用論的解釈（質問、継続、強調など）に貢献する音調」（五十嵐・小磯 2012）と定義される。境界音調における境界は、呼気とともにピッチの上昇が生じ、徐々に自然下降した後再上昇するまでの韻律句の境界であり、文節末音調と文末音調は区別されない。これまで境界音調は、日本語・韓国語ともに文末を中心に記述されてきた。それは、文末音調の方が文の持つ語用論的解釈に大きく寄与するためであるが、文末音調の多くが文節末にも見られることから、文末音調について記述した従来の研究についても概観の必要がある。

本稿では、中間言語に母語の転移が現れる可能性と、目標言語の習得から境界音調が出現する可能性を考慮し、学習者の母語である韓国語と目標言語である日本語を対照する。また、従来の中間言語研究についても概観する。その上で、学習者の境界音調を誤用と見なす従来の母語話者評価研究を再考し、今後の音声教育研究の課題に向けて提言を行う。

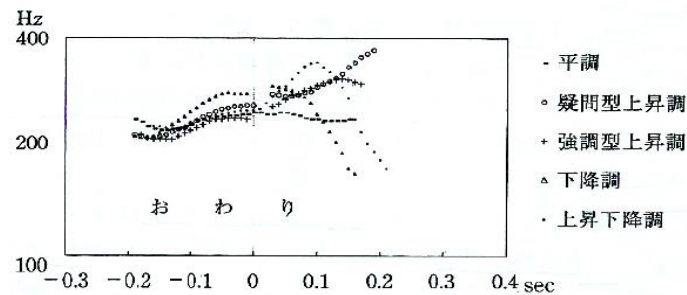
2. 日本語の境界音調の検討

2.1 全体の類型分類

郡（2003, 2012）は、吉沢（1960）、宮地（1963）、川上（1963）、上村（1989）などを

^{注1}下線の部分は、イントネーションが生じた箇所を示す。

整理し、日本語における文末音調として 5 つの型 (図 1) を呈示している。



【図 1】郡 (2003) の文末音調

一方、大規模コーパスデータ『日本語話し言葉コーパス』(前川 2004) に付与された韻律ラベリング体系である X-JtoBI^{註2}には、境界音調として 5 つの型 (L%, H%, LH%, HL%, HLH%) が認められている。表 1 は、郡 (2012) の表を省略・修正し、X-JToBI、土岐・村田 (1989)、郡 (2014) の記述を追記したものである。次節からは、境界音調をめぐる研究においてどのような議論が行われてきたかを音調ごとに整理し、概観する。

【表 1】日本語における境界音調 (郡 2012 の表を筆者が修正・加筆)

吉沢 (1960)	宮地 (1963)	川上 (1963)	上村 (1989)	郡 (2003)	X-JtoBI	土岐・村田 (1989)
平調	(意図表現イントネーションの) 下降調		基本音調	平調	L%	長平 短平
昇調 1	(意図表現イントネーションの) 上昇調	普通の上昇調 (ノ)	のぼり音調 ① ^{註3}	疑問型 上昇調	H%	短昇
		反問の上昇調 (ノ)	のぼり音調 ②		LH%	長昇
		つりあげ調	くだりのぼり音調		HLH%	
昇調 2	([文末以外も含む卓立イントネーションの] 高調)	強めの上昇調	つよめ音調	強調型 上昇調	H%	
		浮き上がり調				
		昇降調 (川上 1956)		上昇下降調	HL%	
降調			くだり音調	顕著な 下降調	L%	長降
			ひきのばし 音調	平坦調 ^{註4} (郡 2014)		弱平

^{註2}ToBI は音の高低を示す基本周波数曲線を基にし、「高さの動きを H (高) と L (低) の 2 種類の「トーン」(tone) の組み合わせで表そうとする」(郡 2011:343) 自律分節韻律理論に基づいたイントネーション表記方式である。「%」は境界音調を示す記号である。

^{註3}上村(1989)は、のぼり音調に 2 つの変種があるとしている。一つは、「末尾の音節をみじかくたかく発音する型」であり、「末尾音節をややながい持続を持たせて上昇的に発音する型」としている。①②の番号は筆者が付したものである。この区別は郡の表ではされていないが、この 2 つは音声的特徴を異にすることから、本稿ではそれぞれを記述した。

^{註4}郡 (2014) は、平坦調を強調型上昇調の一種としたが、本稿ではその音声的特徴を重視し、ひきのばし音調 (上村 1989) と同一音調として扱い、表に示した。

2.2 自然下降のみの音調

X-JToBI では、句末に H%、LH%、HL%、HLH%が「生じていなければ（すなわち下降調であれば）、アクセント句末にラベル「L%」を付与する」（五十嵐他 2006:354）^{註5}。この方式では、自然下降と下降幅が大きい意図的な下降調が区別されず、下降が生じれば同一音調と見なすことになる。しかし、土岐（1998）は、アクセントのみの下降とイントネーションによる下降を比較し、イントネーションによる下降でピッチの落差が大きく実現されたとしている。また郡（2003）も、自然下降のみの「平調」と意図的な下降である「顕著な下降調」を区別している。これらの指摘は、下降幅が小さい自然下降のみの音調と下降が著しく生じる意図的な下降調が区別されるべきであることを示すものと考えられる。

一方、自然下降のみを持つ音調の名称について、「平調」（吉沢 1960、郡 2003）という名称では下降が生じない平坦な音調と区別されにくく（郡（2014）では異なる意味で「平坦調」の名称を用いている）、「下降調」（宮地 1963）は顕著な下降を持つ音調との区別が難しい。また、「基本音調」（上村 1989）や「無音調」（郡 2014）は名称だけでどのような音調か推測が難しい。したがって、本稿では「自然下降調」と呼ぶこととする。

その他、土岐・村田（1989）は、「長平」、「短平」、「弱平」を分類しているが、別売テープの音声を確認すると、実際の音調と名称の間に隔たりがある。長く平らになる「長平」（例：A：これから？ B：ええ、これから。）は下降せず延伸する音調のような名称であるが、実際の音声は延伸のない自然下降調に近い。短く平らになる「短平」（例：A：はたらく？ B：うん、はたらくく。）も話速は速いが、自然下降調である。一方、長く平らでだんだん弱くなる「弱平」（例：A：あの一、いま、じかんは…。 B：すいません、わたしとけいは…。）は、2.6 で述べる「ひきのばし音調」の一種が弱さを伴うものと考えられ、特徴を異にする。

2.3 上昇調

上昇調の分類は、二つの音調を独立した類型として認定する説が多い（吉沢 1960、上村 1989、川上 1963、郡 2003、2014）が、最も網羅的に論じた郡の説を中心に見ると、一つは「連続的にどんどん高くなる（郡 2014:89）」「疑問型上昇調」（例：ノ'ンダ）であり、もう一つは、強めを伴うアクセント的上昇で「音を伸ばしてもそのままほぼ同じ高さを保つ（郡 2003:114）」「強調型上昇調」（例：イヤ'デ↑ス）である。疑問型と強調型は音調の面で区別が難しいとする立場もあるが（宮地 1963）、本稿は「聴覚的に判定できる」（郡 2012:16）と見なす。さらに、次末拍で「文の最後から二番目の拍において既に殆ど上昇が完了し、あとはほぼ平らなまま」（例：ソーナデ『スネ）（川上 1963:25）の「浮き上がり調」も認められているが、郡の強調型上昇調と「上昇形状そのものの差ではない」（郡 2012:93）とする立場に同意し、ある程度上昇した後同じ高さを保つ点から、強調型の変種と考える。

^{註5}X-JToBI は境界音調のラベルとは別に、附加的な音調の特徴について浮き上がり調やつり上げ調（川上 1963）、半疑問調などをプロミネンス層や注釈層で記述する。L%についても自然下降調を認めていないというより、大規模データを処理するため簡素化されたラベリング方式を採用した可能性がある。

一方、X-JToBI は、H%を「単純な上昇調」、LH%を「上昇が始まる前に一定期間低いピッチが持続されるタイプの上昇調」と定義する（五十嵐他 2006:354）。ピッチ曲線から X-JToBI と郡の対応を考えると、H%は連続的上昇が持続時間とともに高くなることから、郡の疑問型上昇調と同じと捉えられる（図 2 左上、五十嵐他 2006:387）。しかし、H%は強調型上昇調も含む可能性がある。句末に H%が生じた後、引き延ばしが見られる例では、連続的上昇ではなく、ある程度上昇が生じてから一定の高さを保つピッチ曲線が確認できる（図 2 右、五十嵐他 2006:395）。さらに LH%では、母音の延伸とともに上昇も高くなることが確認でき、郡の疑問型上昇調に対応していると言える（図 2 下、五十嵐他 2006:391）。

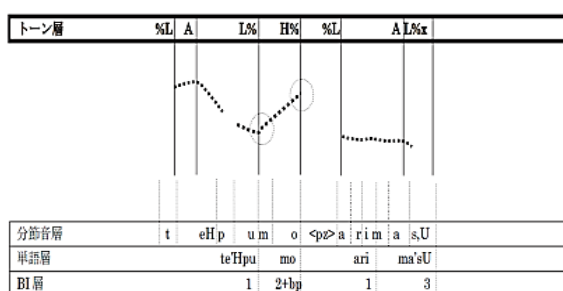


図 7.36 句末境界音調「上昇調 1」
「テープもあります（テープモアリマス）」

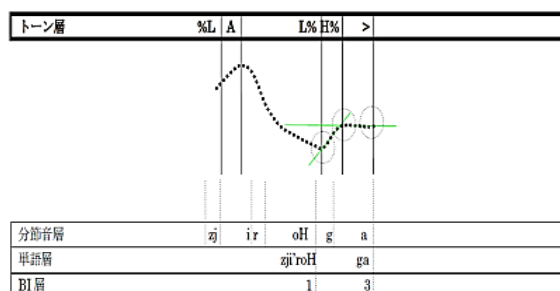


図 7.47 句末境界音調「上昇調 1」の引き延ばし
「次郎が（ジローガ）」

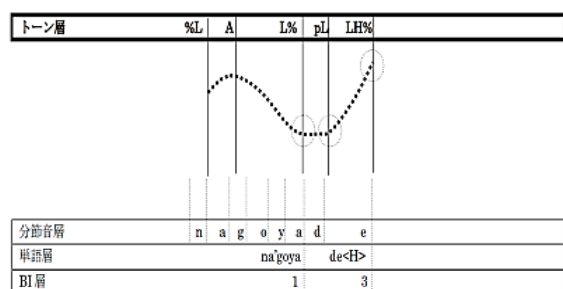


図 7.42 句末境界音調「上昇調 2」
「名古屋で（ナゴヤデ<->）」

【図 2】 H と LH%のピッチ 曲線（五十嵐他 2006）

つまり、郡の疑問型上昇調は、その上昇が生じるタイミングにより H%と LH%にさらに分けられる可能性がある。郡も「上昇開始が早い場合は末尾音節全体の高さの動きが／のような形状になり、遅い場合は＿／のようになる」（郡 2014:89）とタイミングの違いを指摘するが、類型の区別はしていない。本稿は、この分類が学習者の場合、母語話者評価に影響する可能性を考慮し、強調型と疑問型の区別に加え、H%と LH%を区別する。

その他、土岐・村田（1989）は、長さの対立に基づき、長く上昇する「長昇」（例：あります。どうぞ。そこにあるでしょう。）と短く上昇する「短昇」（例：A：いっしょにいく？ B：うん、いくよ。）を認める。しかし、別売テープを確認すると、長昇に著しい延伸は感じられず、短昇は話速が速いため、短く聞こえる。長昇・短昇ともに上昇にタイミングの遅れのない連続的な上昇であり、郡の疑問型上昇調、X-JToBI の H%に当たると考える。

上村も長さ注目し、のぼり音調の変種として「みじかくたかく発音する型」（上村

1989:209)と「ややながい持続を持たせて上昇的に発音する型」(上村 1989:209)を認め、前者は好意的な働きかけや親愛の情を示し、後者は疑念が控えめに表現されるという。さらに、変種のどちらかは示していないが、上昇調は「とがめたての感情をふくませながらききかえす」(上村 1989:208)表現機能があるとする。長い持続を持つ変種が疑念の表現でないと考えると、「とがめたてからの聴き返し」も、持続で示されうると考えられる。

疑念の聞き返しは、川上^{註6}の「反問の上昇調」が「納得しかねて反問してくる」(川上 1963:37) ことと機能的に同一だが、川上は、「反問の上昇はかなり間延びのしたものであっても差し支えない」(川上 1963:37)と延伸が現れる場合もあり、「一段下がったところから発して上昇する」(川上 1963:41)とも指摘する。この最初下降は、「いったんひくい調子にさげてからつぎに上昇調」(例: いくう[▽] たかいい[▽]) (上村 1989:209)が付く「くだりのぼり音調」とも類似する特徴と考える。つまり、聞き手への不信や不満の念は、最初下降と音調全体の延伸でより大きく表現されそうである。郡は、くだりのぼり音調は急下降調と疑問型上昇調に分けられ「ひとつの音調と見る必要はない」(郡 2014:94)とするが、本稿は不信や不満の問い返しという一つの機能を担うと見なし、独立した類型として考える。郡は、同じく問い返しの機能を持つ上昇下降調と疑問型上昇調の複合音調も「分けることが容易」(郡 2014:94)とするが、同一音調と考えられる X-JToBI の HLH%が認められており最初の上昇がくだりのぼり音調とは異なることから本稿も独立した類型と捉える。

こうした親愛の情や反問を示す文末ののぼり音調は、場面や話し手聞き手の関係によっては「なれなれしさ、こびた態度、相手をこどもあつかいにする態度」(上村 1989:209)と捉えられ、使い方を誤ると聞き手に否定的な印象を与える。一方、文節末では、口調の和らげ機能(例: 子供に向かったのおとぎ話)(川上 1963)があるが、「先生口調・教師口調と同様」で「文節末が上がりっぱなし」の NHK ラジオのいわゆる「村岡花子調」(井上 1994)の特徴と同一と考える。一方、この村岡花子調については「文節の終わりに声がピンと高められる...中略...ここで文が切れるんではありませんよ。まだ続くんですよ」(金田一 1951:50)との指摘があるが、のぼり音調が文節末で文の不完結性の表示機能(例: 大勢への演説、説明)(例: わたしがあゝいぜんにいゝおはなしをおゝ...) (上村 1989)を有するとの指摘と同一の指摘であろう。このように、上昇調は、出現場所が文節末か文末かで聞き手に与える印象は異なり、文節末に現れる場合も口調の和らげと同時に不完結性を示す。

さらに、文節末で疑問型上昇調の後「わずかのポーズをおいたあと文章を続ける」(井上 1997:161) 使い方は、社会言語学的には疑似疑問イントネーション(井上 1997)などと言われ、郡(2003)は、この音調が聞き手に相槌や返事を求め判断を委ねたり断定を避けることで否定的なイメージに繋がると述べている。一方、文節末の強調型上昇調は、現在よく聞かれる音調で(郡 2003)、聞き手に与える否定的な印象に関する言及は少ない。

^{註6}川上は、上昇調の一種として「des,mas と一音節に発音し、その e や a の終りごろから急に上昇しつつ s に移る」(川上 1963:26)「つり上げ調」についても指摘しているが、女性アナウンサーに主に見られるとされ、話者が限定的な音調と判断し、本稿では扱わないことにする。

2.4 上昇下降調

高さの変化において上昇後下降が見られる音調については、次のような指摘がある。川上は「一旦卓立させ次いでその後部を下降させる」（川上 1956:7）「昇降調」を、郡は「強調型上昇の直後に顕著な下降が続く」（郡 2003:116）「上昇下降調」を、X-JToBI は「ピッチが上昇したのち下降する」（五十嵐他 2006:354）と HL%を認定している。この点、二つの音調の複合にも見えるが、本稿は「機能はその両者の複合ではないので、ひとつの音調の型と見なす」（郡 2003:116）という考え方に同意し、一つの類型として認める。

この上昇下降調においては、アクセントによる影響について重要な指摘がある。郡は、「アクセント下降がある場合には確実に使えるが、アクセント下降がない場合には使いにくい」（郡 2014:98）とした上で、この傾向を確認するため聴取実験を行っている。その結果、調査協力者からアクセント下降のない「まもる（人名）」、「なるほど」でも上昇下降調は聞かれるとの内省が得られたが、「なるほど」の心からの納得感については上昇量が大きめの上昇下降調の場合、肯定的判断は多くなかったとしている。郡の結果は、アクセント下降がない平板型や尾高型のアクセントの語の最終拍でも上昇下降調は現れうるが、「なるほど」が持つ表現機能を、上昇下降調では十分に表現しきれない可能性を示唆するものである。

一方、上昇下降調が文節末に生じる場合、否定的評価に対する指摘が多い。川上は「東京人の耳には幾分異様にひびく音調」（例：イントネーションモー、ヤハリー、コエノー、…）（川上 1956:8）とし、郡も、多用すれば「尻上がりイントネーション」となり「聞き手の注目を引きつけ、訴えかける意図」（郡 2003:116）と指摘している。「尻上がりイントネーション」は社会言語学的な用語であるが、『昇降調』の名称を併用すれば、わかりやすくなる」（井上 1994:5）の記述から郡の上昇下降調と音声的に同じ音調と考える。表現機能について、郡は、「認識要求に加え相手から反応を引き出そうとする言い方」（郡 2014:98）であるとするが、上村は「相手へのはたらきかけ性にとぼしく、はなしの内容をはなし自身が自分で確認しながら、あるいは納得しながらはなすときにおおくあらわれる」（上村 1989:216）とし、聞き手に対する反応要求や働きかけについては見解が分かれている。

2.5 急な下降調

高低差が大きく急な下降を有する音調は、一つの独立した類型として認定されている。吉沢は「一層際立って下降している文末音調」（吉沢 1960:257）（例：ソナコトアリマセンヨ）として「降調」を認め、上村でも「最後の1音節の中での急速なピッチの下降」（上村 1989:210）（例：いくう、いくかあい）が見られる「くだり音調」を認定している。上村はくだり音調には「音声のつよさ（intensity）の減少」があるとするが、これは「長降」（土岐・村田 1989）の「文末が弱い」との指摘とも共通する。土岐・村田は長降を「長く降りる」音調とし、郡は「顕著な下降調」を「文末母音も延びる」（郡 2003:115）としている。つまり、この音調には著しい急な下降とともに、強さの減少や母音の延伸が見られる。

一方、急な下降を有する音調もアクセントによる最終拍の高低が重要な議論になっている。郡は顕著な下降調が現れるのは「アクセントが平板型か尾高型であって、文末拍がもともと高い場合のみ」(郡 2003:115)とする。しかし、松崎・河野(2010)の例では、文末詞が低く付くと独り言的な感じ(例:「いいね」)になり、高く付くと働きかけが少しある感じ(例:「いいね」)になる。これは、轟木(2008)が下降調の分類に順接(前接のアクセント型に従ってそのまま接続)と高調(前接の語句の最終拍が高い拍はそのまま、低い拍では高く接続)を区別したのと同様の指摘と考える。松崎・河野と轟木は終助詞の例ではあるが、それでも「いいね」のように「低」からの更なる下降も可能と考えられる。

さらに、郡は、顕著な下降調は頭高型や中高型には現れないため、上昇下降調と相補分布を成すとしたが、聴取実験の結果、アクセント下降がない場合も上昇下降調が見られ、「相補分布をしているわけではないが、入れ替えると同じ発話意図の表現ではなくなるというような対立する関係ではない…中略…したがってこの 2 音調はひとつの音韻論的音調の変種」(郡 2014:106)と述べている。これは音韻論的解釈であるが、本稿は 2 音調の音声的違いが、母語話者評価に影響する可能性を考慮し、2 音調を区別する。一方、急な下降調の表現機能は、「不満の態度・感情」(吉沢 1960:257)や「納得」(郡 2014:91)を示すという。

2.6 ひきのばし音調

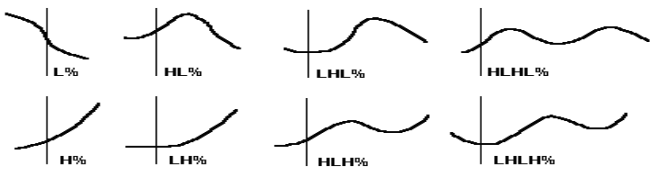
直前の音節と音を同一の高さと強さで、引き伸ばす「ひきのばし音調」(上村 1989)(例: わたくしがあー)について指摘がある。上村は、音声的・機能的に「えー」「えーと」などのフィラーと類似するとし「高年の世代におおい」(上村 1989:217)と指摘している。郡も「平坦な高さのまま、母音をやや強く、長く伸ばす」(郡 2014:91)音調の存在を認め、「平坦調」と名付けているが、文末に現れ、『確実な認識の要求』という強調型上昇調の中核的な働きを弱い形」(例: いらっしゃいませ、どうぞ) (郡 2014:96)で行うことに注目し、強調型上昇調の一種と見ている。一方、X-JToBI のように、類型としては認めず、エクステンダー(>)という記号を付与する方式もある。しかし、エクステンダーは、境界音調の中で L%と H%のみに付与されており、ピッチの上下変化が見られない場合の説明は困難である。郡の強調型としての見方も、文節末に平坦調が出現する場合「確実な認識の要求」とは考えにくいため、本稿はひきのばし音調を一つの独立した音調として扱う。

3. 韓国語における境界音調の検討

3.1 全体の類型分類

韓国語の境界音調を最も網羅的に論じた研究は、Jun (1993, 2000)とイホヨン(1999)である。Jun は、ToBI の韓国語版である K-ToBI (Beckman and Jun 1996, Jun 2000)から境界音調の 9 つの類型(L%, H%, LH%, HL%, LHL%, HLH%, HLHL%, LHLH%, LHLHL%)を呈示している(図 3)。イホヨンは、9 つの類型(H%, M%, L%, HL%,

ML%、LH%、LM%、LHL%、HLH%)を示すが、このうちM%、ML%、LM%はJunには見られない。これは、JunはHとLを基調としM%は認めないが、イホヨンはM%を認定しているためである。イホヨンは、「HL%とML%、LM%とLH%、それからH%とM%とL%が機能的に対立するため…中略…HとLだけでは不十分でMをさらに設定すべき」(イホヨン 1999:36) ^{注7}とする。M%は、チョンミョンスク (2002)、チョミンハ (2011)も認定するが、ML%やLM%は認めず、単一音調としてのM%のみを認定し、両研究ともにM%は、先行音節と比べ上昇・下降せず平らな音調であるとしている。M%の認定については研究者により主張が分かれるが、本稿は、学習者の音調でどのように記述すべき特徴であるかを中心に概観したい。表2にJun、イホヨン、チョンミョンスク ^{注8}、チョミンハの記述の対応を示す。次節からはこの表を参照しながら韓国語の境界音調を整理・概観する。



【図 3】 Jun 2000 の境界音調 ^{注9}

【表 2】 韓国語における境界音調 ^{注10}

Jun (2000)	イホヨン (1999)	チョンミョンスク (2002)	チョミンハ (2011)
L%	Low Level (L%)	L%	L%
			L: %
H%	High Level (H%)	H%	H%
	Mid Level (M%)	M%	M%
			M: %
LH%	Full Rise (LH%)	LH%	LH%
	Low Rise (LM%)		
HL%	High Fall (HL%)	HL%	HL%
	Low Fall (ML%)		
LHL%	Rise-Fall (LHL%)		
HLH%	Fall-Rise (HLH%)	HLH%	HLH%
HLHL%		HLHL%	
LHLH%		LHLH%	
LHLHL%		LHLHL%	

^{注7}イホヨン (1999)、チョンミョンスク (2002)、チョミンハ (2011) 等、以下に取り上げる韓国語で記述された文献における直接引用は、全て、筆者が翻訳したものである。

^{注8}チョンミョンスク (2002) では、K-ToBI の 9 つの類型と M%の他に、H-L%、H-LH%、L-HL%も認めているが、一般的な発話では見られないニュース番組における特殊の類型であるとしているため、本稿では議論の対象に含めない。

^{注9}Jun (2000) では、LHLHL%を図から省略している。

^{注10}イホヨンは、Jun との対応を示している (イホヨン 1999:37 表 3)。() にはその分類を記入した。チョミンハ (2011) は、%を省略し記述しているが、本稿では統一性のため%を表記する。

3.2 下降調と平らな音調

韓国語における下降調は、一つの独立した類型として認定されている。Jun は「L%」を認め、「緩やかな下降調 (a gently falling boundary tone)」(Jun2000:156) であるとし、イホヨンは「Low level」を挙げ「音響的には下降調で実現するが、下降よりは最終点の高さが、より明確に認知される」(イホヨン 1999:29) とし、下降幅は大きくないとしている。これらの指摘から、Jun の L%とイホヨンの Low level は、ともに、著しい下降が現れるような音調ではなく、自然下降調に近いものと考えられる。実際、この音調は平叙文の末尾に最も一般的に見られるとの指摘 (Jun2000) から、デフォルト的な音調と考えられる。

一方、L%は、「平らな音調 (a level ending)」(Jun2000:156) も含む。しかし、チョンミョンスクとチョミンハは、K-ToBI を基本とした分類を行い Jun (2000) の定義に従っているものの、平らな音調は別として M%を認定し「最終音節の音の高さが上昇・下降せず平行に一定時間持続する類型」(チョンミョンスク 2002:181) や「最終音節の音の高さが先行音節に比べ上昇・下降せず平らに持続する類型」(チョミンハ 2011:56) と捉えている。さらに、チョミンハは M%の母音延伸が見られる「M:」を認め、非断定性を示すとしているが、この点、M%は延伸を含まない音調と見ており、チョンミョンスクと違う点と考えられる。このように、韓国語の下降調は、その下降の高低さが大きい著しい下降調ではなく緩やかな自然下降調であるが、その分類方法によっては平らな音調を含む場合もある。

3.3 上昇調

韓国語における上昇調は、複数の類型が認定されている。Jun は、H%、LH%、HLH%、LHLH%を認めるが、LHLH%は、出現が稀なため、本稿は H%、LH%、HLH%を中心に議論する。Jun は「LH%は H%より上昇が遅れる」(Jun2000:149) ため、H%は最終音節前ですでに上昇が始まり、LH%は最終音節で急激に上昇が始まるとし、上昇のタイミングの違いを指摘している。イホヨン (1999) は、High Level と Full Rise を区別するが、こちらは長さで上昇の急激さに注目する。イホヨンは、High Level は Full Rise に比べ短くピッチ上昇が急で、次末音節より著しく高く発音されるが、上昇はあまり知覚されないとしており、卓立的上昇と捉えていると考えられる。しかし、上昇が急激であってもタイミングが遅れて生じれば、聴覚印象的に区別できそうである。

また、イホヨンは Mid Level も次末音節より高く、上昇調として発音されるが、「High Level に比べると低い」(イホヨン 1999:29) とし、Low Rise も上昇調に認定するが、Mid Level と同じく Full Rise に比べ最高値が低く上昇の傾きも緩やかであるとしている。この高さの相対的な度合いによる分類は、Jun とは異なる。さらに、Jun は「HLH%」を認め、「下降上昇調 (a falling-rising boundary tone)」(Jun2000:157) とし、HL%と H%の複合音調であると述べている。イホヨンは Fall-Rise が HLH%に対応するとするが、Fall-Rise は下降した後上昇するのに対し、HLH%は上昇下降した後上昇がみられる点で違いがある。

3.4 上昇下降調

韓国語における上昇下降調は複数の類型が認定されている。Jun (2000) は HL%、LHL%、HLHL%、LHLHL% を認めるが、HLHL%、LHLHL% は出現が稀なため、本稿では HL% と LHL% を中心に議論する。Jun は、HL% と LHL% の間には上昇のタイミングが異なるとし、HL% は「最終音節の前ですでに下降が始まり最終音節にかけて下降する」(Jun2000:156) のに対し、LHL% は「最終音節内で上昇する」(Jun2000:157) と述べている。厳密には、Jun は HL% を下降調としているが、図 3 の HL% のモデルでも確認出来るように最終音節内で上昇が全く見られない訳ではなく、次末音節から始まっているため、本稿は上昇下降調として扱う。

一方、イホヨンは、High Fall と Rise-Fall を認め、最初の部分における下降を区別の手がかりとしている。Rise-Fall は「少し下降した後上昇する…中略…始めの部分でのピッチ下降現象は High Fall には見られない」(イホヨン 1999:31) とするが、最初の下降は持続時間が短く下降幅もわずかであるため、音声的・音韻的区別に意味のある特徴とは考えにくい。最初の下降が見られないとしても、Jun (2000) の指摘通り、上昇のタイミングが遅れば異なる音調として知覚されそうである。また、イホヨンは「High Fall は Rise-Fall より短く実現され下降がもっと急激」(イホヨン 1999:31) とし、長さや下降の急激さでも区別している。なお、Low Fall も認め、「High Fall に比べずっと低く始まりずっと低く終わり、下降の傾きも緩やか」(イホヨン 1999:30) とするが、Low Fall は Jun では認定しない。

4. 日本語と韓国語の境界音調の対照と母語話者評価研究の展望

4.1 自然下降調と急な下降調

日本語において自然下降調は一つの類型として確立されており、韓国語でも緩やかな下降調が認められ、自然下降調に近い音調と考えられるため、両音調の違いは殆どないと考ええる。学習者の中間言語では、K-ToBI の L% を類型分類に採用した禹昭娟 (2014) に指摘があるのみで、他ではあまり検討されていない。その理由は「end focus」(李恵蓮 1999)、「韓国語的イントネーション」(崔泰根 2005)、「特徴的な句末の伸ばし下げイントネーション」(金瑜眞 2013) など、聴覚印象において際立つ音調に焦点が置かれ、著しい上昇や下降、延伸などを含む音調を中心に議論が行われてきたためであろう。

しかし、今後は、上昇下降調や上昇調のような際立つ聴覚印象を持つ音調が境界音調全体の中でどの程度の割合で見られるかを確認し、学習者の習得状況調査に役立てるためにも、自然下降調を学習者の類型として含めることが望ましい。母語話者評価の面で考えると、自然下降調は日本語韓国語で類似する音調であり、デフォルトな音調でもあるため、学習者の音声に現れても厳しく評価されないと考える。一方、急な下降調はこれまで中間言語研究では取り上げられなかったが、下降とともに弱くなるため、押しが強いなどの否定的評価をされる可能性は低い。しかし、韓国語には見られない音調であり、学習初期よ

り学習者がある程度日本語の音調を習得してから出現する可能性が高い。また、音調の出現については、アクセントの下降がある際にも出現するかなどまだ不明な点もあるが、音調の持つ発話意図を十分に伝える上で、アクセントが影響することは確かである。従って、急な下降調の習得については、アクセント知識の習得を考慮した調査を行う必要がある。

4.2 平らな延ばし音調

平らで延伸を含む音調は、日本語では「ひきのばし音調」(上村 1989)、「平坦調」(郡 2014)、韓国語では M%が長音化した「M:」(チョミンハ 2011)がある。中間言語研究でも「長呼調」(李恵蓮 1999)、「平板調」(崔泰根 2005)、「M」(金瑜眞 2013)など、すでに指摘がある。一方、この音調の名称は再考の必要がある。「ひきのばし音調」や「長呼調」ではピッチの変化が殆どないことが認識されにくく、「平坦調」、「平板調」、「M」では、母音延伸の特徴が認識されにくい。本稿は二つの特徴を取り上げ「平らな延ばし音調」としたい。母語話者評価の面で考えると、この音調は、日本語と韓国語で同様に現れ、母音の延伸は際立つ特徴ではあるもののピッチ変化は殆どないため、多用しなければ低い評価は受けないと推察される。実際、長呼調における母語話者評価を検討した李恵蓮(2002)でも、長呼調が上昇調や上昇下降調に比べそれほど不自然とは評価されなかった結果が示されている。

4.3 上昇調

上昇調は、両言語で分類に相違がある。日本語では大別して連続的上昇をする「疑問型上昇調」と、強めを伴った上昇後同じ高さを維持する「強調型上昇調」が認められる(郡 2003)。さらに「疑問型」は、上昇の前に一定のピッチが持続するか否かにより、「H%」と「LH%」に区別される可能性がある。一方、韓国語では、上昇のタイミングのずれにより「H%」と「LH%」が区別され、他に上昇の急激さや度合いも分類基準となっている。両言語で共通するラベリング方式である ToBI の H%と LH%については、一定のピッチが持続した後の上昇は、上昇のタイミングが遅れるとの記述と同質のものと考えられる。一方、日本語の強調型は、上昇後一定のピッチの持続や強めの伴うという特徴については指摘がないが、上昇の度合いが高くない点ではイホヨンの Mid Level と類似する可能性がある。

学習者の中間言語においては、「上昇調」(李恵蓮 1999, 崔泰根 2005)、「H%」(金瑜眞 2013, 2014, 禹昭娟 2014)、「LH%」(金瑜眞 2014, 禹昭娟 2014)が認められ、K-ToBI の分類を採用した禹昭娟と金瑜眞は H%と LH%を区別している。母語話者評価の面から考えると、上昇調は H%、LH%など概ね日本語・韓国語で共通し、上昇調が学習者の音声に出現しても低い評価を受けるとは考えにくい。上昇幅の小さい Mid Level や Low Rise が転移するにしてもピッチ幅が小さいことから、低く評価されないと考える。それより、音調の持つ表現機能を適切に運用できるかが課題となる。使用場面や相手を誤ると、「馴れ馴れしい」や「子ども扱い」など、感情的に誤解を招くマイナス評価をされたり、疑似疑問イ

ントネーションに捉えられ自信が無いように聞こえる恐れがある。同じく、両言語で共通する HLH%も、音声的な要因より、疑念の問い返しという表現機能から適切な運用が課題となりうる。HLH%は、他の類型に比べ頻出しないため、これまでの中間言語研究では取り上げられてこなかったが、LH%と機能的に類似するため、今後は検討する必要がある。

4.4 上昇下降調

上昇下降調は、日本語・韓国語で分類基準の相違が見られる。日本語の上昇下降調は一つの類型として認められるが、X-JtoBI の HL%のピッチ曲線（五十嵐他 2006 の図 7.10）を確認すると、K-ToBI の HL%と同じ音声的特徴を持つと考えられる。韓国語の上昇下降調は HL%と LHL%に分類されることが確認出来たが、上昇のタイミングのずれにより区別され、上昇の急激さや度合いも分類基準となっている。一方、中間言語研究においては、上昇下降調（李恵蓮 1999^{注11}）、昇降調（崔泰根 2005）では HL%と LHL%を区別していないが、K-ToBI を参考にした金瑜眞（2013, 2014）や禹昭娟（2014）^{注12}では区別される。

上昇のタイミングが遅れる LHL%は母語の転移により生じる可能性が高いが、母語話者評価の面から考えると、日本語に現れず日本語らしくないため、低く評価されると考えられる。一方、HL%は日本語母語話者にも見られる音調であるため、否定的な評価を受ける可能性は低い。High Fall より下降が小さい Low Fall（イホヨン 1999）が現れるとしても、ピッチ幅が小さいことから、低く評価されないと考えられる。ただし、HL%は本来、日本語母語話者の使用する場合にも「甘え」「幼さ」（井上 1994）と結びつくとの指摘から、音調そのものが持つ不自然さはないが、発話者が意図しない印象を与えてしまう可能性がある。さらに、アクセントとの関係も考慮する必要があり、アクセント下降が無い語に HL%が現れる場合は、本来の表現意図が十分に伝わらず、評価を下げる可能性が考えられる。

5. まとめ

本稿では、対照分析の観点から韓国人学習者の境界音調をめぐる評価研究に残された課題について論考を述べた。日本語および韓国語の先行研究の異同を中心に議論を行い、これまでの中間言語研究で十分に取り上げられなかった、音調の分類や評価の問題についてその一端を検討することが出来た。しかし、それぞれの言語で示した音調は韻律音韻論のレベルで抽象化され、言語内だけでなく言語間でその詳細を対照することは困難な点も多い。韓国人学習者の境界音調の類型を捉え、その評価を論じるためには、各音調が音声的にどう異なるか、つまり異音レベルのどこからどこまでがその類型に含まれるかを考慮しなければならない。今後は、とりわけ、上昇下降調と上昇調の記述において、特にピッチ幅とタイミングの微妙な違いを、下降調と上昇下降調では前接語のアクセント型との関係

注11 李恵蓮の上昇下降調については、上昇後下降するとのみ指摘されており、音調の実態が HL%に近いものであるか、LHL%に近いものであるかは現時点では把握出来ない。

注12 禹昭娟（2014）と金瑜眞（2014）では、K-ToBI に従った分類を行い音調の定義は述べていない。

をどこまで包括し、どこから別音調と見なすかの検討が必要である。その上で、「母語である韓国語の体系」あるいは「目標言語である日本語の体系」に寄りかかるのではなく、「中間言語」を記述するための枠組みである「韓国人日本語学習者の発音を類型化するための句末境界音調モデル」を改めて構築する必要があると考えられる。

【参考文献】

- 李惠蓮(1999)「韓国人日本語学習者の日本語発話の“end focus”における母語の影響—句末を中心に」『日本語教育』103, pp.69-78
- 李惠蓮(2002)『韓国人日本語学習者の日本語発話の“end focus”に関する研究』広島大学大学院教育学研究科日本語文化教育学専攻博士論文
- 李惠蓮(2004)「ソウル方言話者の日本語発話に対する日本語母語話者の評価—“end focus”を中心に—」『日語日文学研究』48,別刷, pp.1-20
- 五十嵐陽介・菊池英明・前川喜久雄(2006)「第7章 韻律情報」『日本語話し言葉コーパスの構築法』国立国語研究所報告 No.124, pp.347-454
(http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/csj/k-report-f/07.pdf (閲覧日 2015 年 10 月 31 日))
- 五十嵐陽介・小磯花絵(2012)「句末境界音調のピッチレンジに与える要因：『日本語話し言葉コーパス』の分析」第2回コーパス日本語学ワークショップ予稿集 pp.15-24
- 井上史雄(1994)『『尻上がり』イントネーションの社会言語学』佐藤喜代治編『国語論究第4集 現代語・方言の研究』明治書院 pp.1-29
- 井上史雄(1997)「イントネーションの社会性」『日本語音声2 アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』三省堂, pp.143-168
- 禹昭娟(2014)「韓国人日本語学習者の自発音声の句末の韻律的特徴」韓国日本語学会第29回学術発表会論文集, pp.114-120
- 上村幸雄(1989)「日本語のイントネーション」『ことばの科学』3, pp.193-220
- 大坪一夫監修(1987)『日本語の音声(2)』NAFL Institute 日本語教師養成通信講座
- 川上泰(1956)「昇降調の三種」『音声学会会報』92, pp.7-8/25.
- 川上泰(1963)「文末などの上昇調について」『国語研究』16, pp.25-46
- 金瑜眞(2013)「日本語句末イントネーション習得における韓国人学習者の内省」2013 年冬季国際学術大会発表論文集,韓国日語日文学会, pp.393-402
- 金瑜眞(2014)「韓国人日本語学習者における句末伸ばし下げイントネーションの類型」第28回日本音声学会全国大会予稿集, pp.129-134
- 金田一春彦(1951)「コトバの旋律」『国語学』5, pp.37-59
- 小磯花絵(2014)「日本語自発音声における複合境界音調と統語構造との関係」『音声研究』18(1), pp.57-69
- 郡史郎(2003)「イントネーション」『朝倉日本語講座3 音声音韻』朝倉書店, pp.109-131

- 郡史郎(2011)「イントネーション」『音声学基本辞典』城生佰太郎, 福盛貴弘, 斎藤純男編著
勉誠出版, pp.338-348
- 郡史郎(2012)「東京方言における文末の強調型上昇調の機能について」『音声言語の研究』6 大阪大学大学院言語文化研究科, 勉誠出版, pp.15-22
- 郡史郎(2014)「日本語の文末イントネーションの種類と名称の再検討」『言語文化研究』41 大阪大学大学院言語文化研究科, pp.85-107
- 崔泰根(2005)「韓国語日本語学習者の日本語音声に見られる「韓国語的イントネーション」について: 「フレーズ末昇降調」と「発話リズム」による母語干渉を中心に」第19回日本音声学会全国大会予稿集, pp.25-30
- 土岐哲(1998)「アクセントの下げとイントネーションの下げ」『阪大日本語研究』10, pp.53-66
- 土岐哲・村田水恵(1989)『発音・聴解』荒竹出版
- 轟木靖子(2008)「東京語の終助詞の音調と機能の対応について—内省による考察—」『音声言語VI』近畿音声言語研究会, pp.5-28
- 前川喜久雄(2004)『『日本語話し言葉コーパス』の概要』『日本語科学』15, pp.111-133
- 松崎寛・河野俊之(2010)『日本語教育能力試験に合格するための音声 23』アルク
- 宮地裕(1963)「イントネーション」『話しことばの文型(2)』国立国語研究所, pp.178-208
- 関光準(1989)「韓国語話者の日本語音声における韻律的特徴とその日本語話者による評価」『日本語教育』68, pp.175-190
- 村中淑子・原紀代(1994)「助詞の卓立」の頻度と文法的機能および音響的特徴について」『言語文化研究』1, pp.193-208
- 吉沢典男(1960)「イントネーション」『話しことばの文型(1)』国立国語研究所, pp.249-288
- Beckman, Mary E. and Sun-Ah Jun. 1996. *K-ToBI (Korean ToBI) labeling conventions (Version 2.1)*. Ms, Ohio State University and UCLA.
- Jun, Sun-Ah. 1993 *The Phonetics and Phonology of Korean Prosody*, Ph.D. dissertation, Ohio State University.
- Jun, Sun-Ah. 2000. "K-ToBI (KOREAN ToBI) labelling conventions." version 3.1. *UCLA working papers in phonetics* 99, pp.149-173
- イホヨン(이호영)(1996)『국어음성학(国語音声学)』太学社.
- イホヨン(이호영)(1999)「국어핵억양의음향음성학적연구(韓国語核抑揚の音響音声学的研究)」『マルソリ』38, pp.25-39
- チョミンハ(조민하)(2011)『연결어미의 종결기능과 억양의역할(連結語尾の終結機能と抑揚の役割)』高麗大学校大学院国語国文学科博士論文
- チョンミョンスク(정명숙)(2002)『현대국어말소리의통시적변화; 1950년이후방송자료를 중심으로(現代国語言音の通史的变化; 1950年代以降放送資料を中心に)』高麗大学校大学院国語国文学科博士論文